

(鹿児島市郡元町一の宮神社境内)

位置と環境

遺跡地は谷山町と合併する以前の、旧鹿児島市の南端紫原シラス台地の北東麓に、広がる低い沖積台地がある。一の宮神社の境内は、この台地の縁辺に立地している。神社の境内は、更に一段低い低地に3mの比高をもって望んでいる。境内は神殿を囲む楠の大樹が鬱蒼と茂っているが、神殿の西北部に楠の生えていない空地があり、この地点を調査した結果、遺構を発見した。

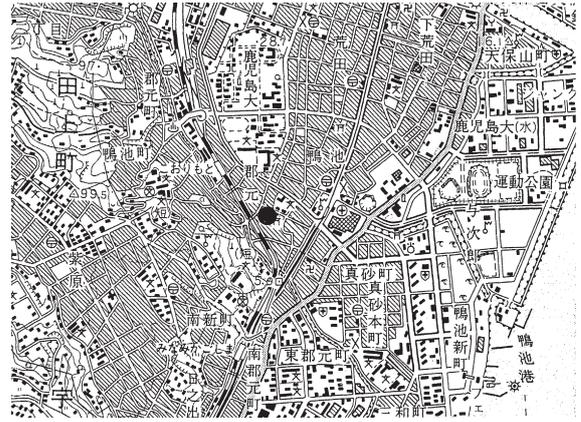
調査の経緯

遺跡地は、山崎五十麿が弥生の遺跡として指摘されたところである。鹿児島市の援助を受け、寺師見國・三友国五郎の協力を受け、鹿児島市内及び近傍の高校、中学の教師・生徒の有志の方々の共同作業を頂き、昭和25年7月1日～13日、同年7月26日～8月21日、そのほか10日の合計50日間発掘調査を行った。

発掘地域は、南北22m、東西12～5mの範囲に渡って調査を行った。地層は地表より50cmの厚さの赤褐色砂質腐植土層が、水平に堆積し(第1層)薩摩式土器の包含層となり、その下に30cmの厚さに粘質の黒土層が堆積し(第2層)、基盤は赤褐色の砂層(第3層)でこの表面は大隅式土器の包含層となっている。



第2図 遺構の配置図



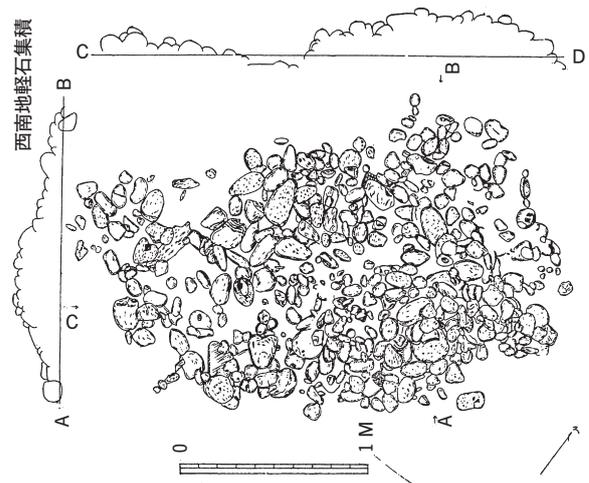
第1図 一の宮遺跡の位置

遺構

住居跡は基盤の赤褐色砂層に、ほぼ南北に並んで、2.5～2mの間隔をへだてて3個の竪穴と、これらに隣接して多数の柱穴を発見した。

南端の竪穴は、円形と方形の住居跡が複合したものである。南より第1、第2、第3住居跡とし、複合した方形住居跡を第4、柱穴群を南より第5、第6住居跡とした(第2図)。

第1住居跡は二重の周壁に囲まれ、内壁は高さ25cm、外壁は10cmで、要所を軽石で固めている。竪穴の規模は内径6m、外径8.5m。中心に縦1.3m、横1m、深さ40cmの楕円形の炉跡があり、床面は平坦であるが、炉の回りは僅かに盛り上がっている。竪穴の形は不正円形であるが、北壁に幅1m、奥行き70cmの張出しを設け、西側には幅2m・奥行き50cmのベッド状遺構、東側には竪穴を3分一周するほど

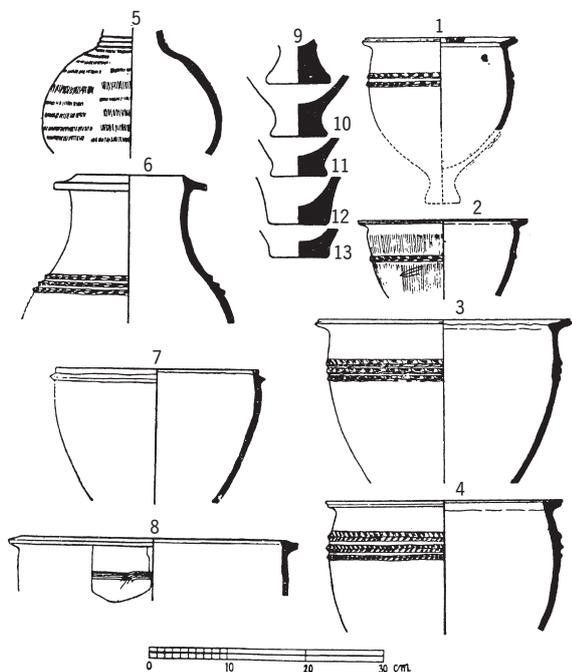


第3図 軽石集石遺構

のベッド状遺構が設けられている。柱穴は炉を中心に4か所、外壁に沿って約2m間隔で9か所あり、共に円形で直径20cmほどであるが、深さは床面のもものが20cmであるのに対して、外周のものは30~40cmと深く、堅固に作られ、軽石で柱の根固めを計ると合わせて風圧に耐える構造になっている。

第1住居跡内の床面には、生活の後を示す遺物が良く残され、炉を囲んで床面東側に甕形土器3個、長径28cmの軽石製輪（土器の台）、西北寄りの床面からは壺形土器、東側のベッド状遺構とその下の床面からは磨製の石鏃が各一個、石庖丁1、さらに近接する床面から磨製鑿形石斧1個が出土している。

第4住居跡は、第1住居跡より先に出来ていたもので、第4住居跡の一部をうめて第1住居跡が作られていたのである。第4住居跡は、東西4.50m、南北は4mの略方形で、側壁の立ち上がりは40cmあり、第1住居跡より深い。床面は平坦で、南の壁面に接して、縦1m、横50cm、深さ15cmの隅丸方形の炉が設けられており。炉の底には花崗岩と軽石を敷きつめ、その上に灰が堆積している状態であった。南側の側壁から、さらに外方へ幅1.5m奥行き60cmの作り出しが、階段状に設けられ入口のような体裁を形作っていた。柱穴は床面に2個、作り出しに沿って2個あり、ここでも中の柱穴は浅く、外回りのもの



第4図 一の宮遺跡下層出土の土器

は深く、第1住居跡と同様な関係であった。遺物は住居跡の西南角に接して打製石斧が一個出土した。

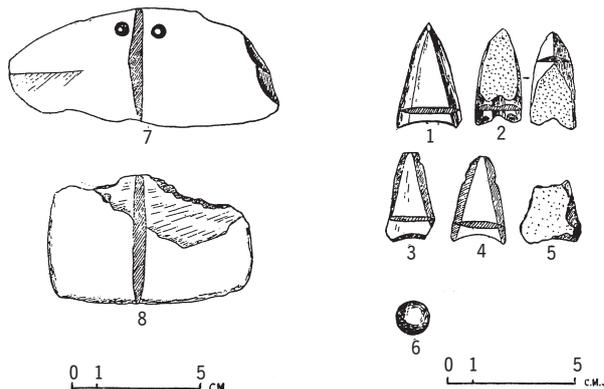
この住居跡の西南角に接して、幅85cmの溝が、南東-北西の方向に掘り込まれていたが、近世のものであった。

第2 竪穴住居跡は、第1 竪穴住居跡の北西2mの間隔を隔てて検出されたが、北東は中郡小学校との境のブロック塀で切断されていて、全貌は明らかにできなかったが、径約3.8mの略方形であり、深さは35cmであることが判明した。南西側壁に沿って中程に径15cm、深さ30cmの柱穴が判明した。東南側壁には幅50cmのベッド状遺構が顔を出しているのが認められた。遺物は床面に軽石礫に混じって甕形土器の口縁部が出土している。口縁端は水平に屈曲し、上面に五本の歯をもつ櫛で二回十条の沈刻を施し、同じ土器の頸部には、同施文具で、五条の沈刻線を巡らしている。

第2 竪穴住居跡の北西2.5mに第3住居跡が出土した。中郡小学校境界のブロック塀で断れて一部の残存状態を知るのみであった。角円方形の竪穴住居跡である。径3.8m、側壁の深さ35cm、床面は高低二段となり、共に傾斜し、低い床面は軽石が敷かれていた。柱穴は側壁に沿って2か所、床面中央に1か所の計3か所で発見された。遺物は土器の小片が発見されたが、特徴は不明なものであった。

第5、第6住居跡は多数の柱穴と一個の炉跡があり、平地住居跡2か所と判断した。

この地域では、第2層から縄文後期の市来式、晩



第5図 下層出土の石庖丁・石鏃・土弾

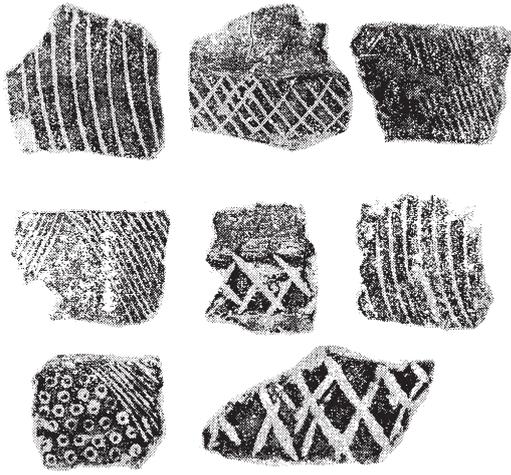


写真1 一の宮遺跡上層出土の土器

期の夜臼式，弥生中期の山ノ口式，瀬戸内の中期壺形土器などの土器片が出土している。

軽石集積地

第3住居跡の西南部に，第3層の基盤層に基部を持つ軽石の集積遺構が発見された。長さ2.5m，幅1.5m，高さ50cm，主軸方向は北東—南西方向に積み上げた楕円形の積み石塚である。積石の両側には集積に沿って，共に深さ1m，長さ2.5m，幅1.5mの楕円形の掘込みがあり，東南側の掘り込みの底面には，甕形土器が納められており，西北側の掘り込みには，集石に接する面は，軽石で畳み，掘り込みの底面は，軽石を並べて四区画し，最深部には丹塗磨研した長頸壺形土器が納められ，浅い区画には焚火の跡が残されていた。

軽石集積遺構の周辺には，方形石庖丁・磨製石鏃・軽石製器台などが出土し，周辺に広がっていたと推定される竪穴群（集落）の中心となる遺構であったと思われる。

遺物

薩摩式土器

この遺跡の主要な土器は，考古学雑誌第36巻第1号寺師見國「鹿児島県の弥生式土器」に記載の大隅式土器と薩摩式土器である。薩摩式土器は現在，成川式と呼ばれている。本遺跡では第1層が薩摩式（成川式）の包含層である。破片のみでまとまったものは少ないが，壺形土器は倒卵形の器胴部に低い口頸部を付け，底部は尖り気味の丸底か，小さな平

底である。頸部と胴部に凸帯を巡らす。凸帯は絡縄・竹管文・篋描文などで，幅も広狭種々である。甕形土器・鉢形土器の底部は，中空の脚台が特徴となっている。

大隅式土器

便宜上大隅式としたが，大隅式は，南九州に見られる弥生式土器から，形式的に抽出したものであるが，一の宮の土器は遺跡固有の土器で，両者間には差異があり，正しくは一宮式と呼ぶべきである。下層の黒土層が包含層である。第1号住居跡は，生活の跡が良く保存され，第2第3住居跡にも若干の遺物が残されており，集積遺構に付随する遺物も多い。土器は胎土に砂粒を多く含み雲母を含むものもあり，黒褐色粗造である。第4図1～4，6・7の土器は第1住居跡の出土である。6は，壺形土器で球形の器体に，直立した頸部をつけ，口縁部は僅かに外反し，端部で外反して広い平坦面を作る。肩部に断面三角の絡縄凸帯を三条巡らした平底土器である。1～4は，甕形土器である。口縁部が「く」字形に屈曲する甕形土器で，底部は南九州中期甕形土器特有の充実した脚台をつけている。頸部には2～3条の絡縄凸帯を巡らす。1号土器の口縁部上面には，5本の歯を持つ施文具で，縁を横ぎって10条の刻目を5か所施す。7の土器は鉢形土器で，同じく充実した脚台をつけるものと思われるが，口縁部は内傾気味の直口で，一条の三角凸帯を巡らす点は，甕形土器と異なる特殊な土器である。しかし，前の壺や甕との共伴関係は明らかで同一時期のものである。第4図9～13は第1住居跡出土で，甕形土器と壺形土器の底部である。

第4図8の土器は第2住居跡出土の甕形土器である。この土器は頸部に絡縄凸帯の代わりに，5条の櫛目文を巡らす。第4図1の施文具と同じ施文具を使用している。第4図5は，瀬戸内から移入されたと思われるもので，無花果形壺形土器である。頸部に凹線を巡らし，上胴部は縦位の沈刻線を，6mm間隔の横位篋磨きで擦り消して文様化し，下胴部は篋磨きしたものである。

以上の土器と共存関係にある石器には，磨製石鏃・磨製石庖丁・磨製鑿形石斧・打製石斧が出土してお

り、ほかに軽石がよく使用されており、特に復元径28cmの軽石製環状器台は、砂層の床面に適応して作られたものであろう。

一の宮遺跡は、鹿児島県で始めて発掘によって明らかになった、弥生中期後半の集落遺跡である。南九州では甕形土器の底部に、充実した脚台が現れるのは中期前半で、終わるのは、中期後半であり、一の宮遺跡はこの時期に当たる。大根占町山ノ口遺跡は、開聞岳第二次爆発時に出現した遺跡で、弥生中期後半の遺跡として、絶対年代が明らかで、時期判定の基準であるが、昭和55年～56年に国道226号成川バイパス建設に関して行われた成川南部遺跡の発掘調査によって、山ノ口式土器と一の宮式土器の相伴関係が明らかになり、一の宮式土器の年代は重ねて証明された。一の宮遺跡は軽石礫を集積した祭跡遺構をもつ、大小の竪穴住居跡および平地住居跡からなる弥生中期後半の集落であった。

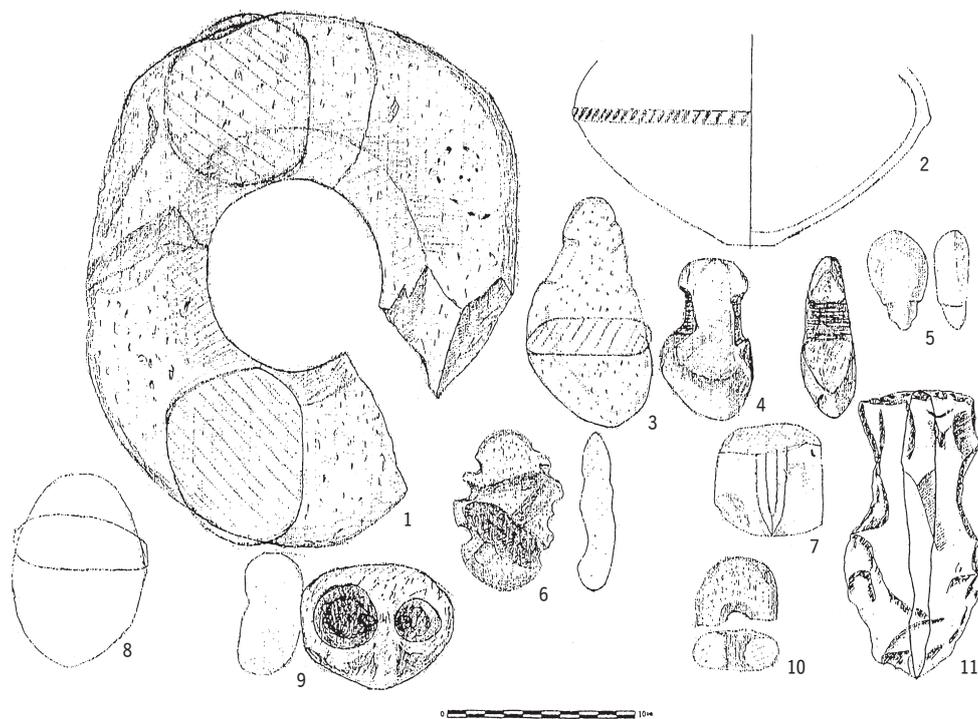
資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

- 河口貞徳1949「鹿児島市一の宮遺跡」『日本考古学年報』2
 河口貞徳1951「一の宮報告」『考古学雑誌』第三十七卷第四号
 河口貞徳1983「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告』第七集
 鹿児島県教育委員会1983「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』24
 寺師見國1915「鹿児島県の弥生式土器」『考古学雑誌』第三十六卷第一号
 小林行雄・杉原荘介1958『弥生式土器』集成・本編1 日本考古学協会 弥生式土器文化総合研究特別委員会・東京堂出版

(河口貞徳)



第6図 一の宮遺跡出土の軽石製品・他

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1—1号住居跡出土軽石製器台 | 7—下層出土の磨製石斧 |
| 2—集石遺構西南土坑の長頸壺（頸部は欠損） | 8—10区下層出土の軽石製加工品 |
| 3—跡出土の軽石製呪具 | 9—表層出土の軽石製顔面 |
| 4—7区下層出土の軽石製呪具 | 10—軽石集石遺構出土の軽石製環 |
| 5—1号住居跡出土の軽石製呪具 | 11—4号住居跡東部出土の打製石斧 |
| 6—3区出土の軽石研磨具 | |